

『おねーさんの耳はロボの耳』 第四話

著作 a s h

この作品は『To Heart』（リーフ・ビジュアルノベルシリーズVOL.3）を元としています。

これまでのあらすじ

来栖川本社の意向によって、感情制御システムの改造が行われることになったHMX13型セリオ。その改造を終えて、浩之とマルチが平和に暮らす家に何の前触れもなくやって来たセリオは何と「セリオおねーさん」として、強引に彼らと同居することを告げた。

自らを“恋愛仕様”と語るセリオに、相変わらず浩之は振り回されるばかりだったが、そこに“幼なじみ”の神岸あかりが参戦。

浩之のHM嗜好に憂いながら、あかりはセリオに対する闘志を小さい胸に秘めるのだった。

7. 食卓の風景

藤田家の食事風景はちよつと異様である。頭数だけは三人なのに、用意されるのはいつも一人分だからだ。

別に食費が少ないからこうなっているのではない。浩之の他にはセリオとマルチだけしかないの、結果として食事を摂るのは浩之一人とすることになるだけのことだ。

その時もいつものように浩之が一人で食事を摂っていた。だが、一人で言うのはある意味正しくはない。何故なら、浩之の傍らにはマルチが、正面にはセリオがいるからだ。

「毎度のこととは言っても、食べるのが浩之さん一人って言うのも寂しいわね」

ご飯を口に運んでいる浩之を見つめながら、セリオがほんの少しため息混じりにもらした。

すると、浩之もそれに答えようとする。ちなみに、ご飯はまだ口の中に入ったままの状態だった。

「そりゃ、しょうがな…」

すかさずセリオが苦笑いをしながら、それをたしなめる。

「…浩之さん、口の中にご飯が入ってるわよ。しゃべるのは飲み込んでからにしてちょうだい」

今に始まったことではないのだが、結構セリオはこのような基本的なマナーに対してうるさいところがあるようで、それを十分知っていながらも、いつも注意されてばかりの浩之の方も結構な剛の者と言えよう。

「い…」

またしてもセリオに注意をされた浩之は、ちらっと傍らのマルチの方を見て、手振りでも「お茶をくれ」と告げる。

「はい、浩之さんどうぞ」

とマルチが笑顔で差し出した湯飲みを掴むと、そのままお茶を一気に飲み干して行く。

そして、空になった湯飲みを置いて一息ついてから、セリオに中断された言葉を言い直

す。

「そりゃ、しょうがないじゃないか。今さらって感じだし。作ってくれるセリオたちにしてみれば張り合いがないかも知れねーけどな」

するとセリオは首を左右に振り、それに答えた。

「うーん、わたしは浩之さんだけのご飯を作ることに不満はないわよ」

ほぼ同時にマルチも。

「そんなことないです。わたしは浩之さんのご飯作れるのって、すごく嬉しいですよ」

「へへ、そ、そうか？ 何か照れるな…」

二人に嬉しいことを言われた浩之は（箸を置いて）手を頭にやって、掻くしぐさをした。こうまでのはっきりと言われて、悪い気はしないと言うものだ。だが、セリオが微笑みながら、

「だって浩之さんは愛するご主人様ですからね」

と言った瞬間、浩之の動きが止まった。

「…嬉しいんだけど、何か恐いよーな気もするんですけど、セリオさん…」

こわばった笑顔のまま浩之が答えると、セリオはまたも笑顔で続ける。

「どうして？」

「いや、ははははは…」

心なしか浩之の笑顔は引きつっているようだった。そんな浩之をよそに、

「でも、浩之さんがお望みなら、一緒に食べてあげてもいいわよ」

とセリオが唐突に話題を戻す。

『おねーさんの耳はロボの耳』第四話

その言葉にマルチと浩之の二人は同じように驚きの表情を見せて、

「え？ そんなこと出来るのか？」

「セリオおねーさん、本当に出来るんですか？」

と同じようにセリオに質問をするのだった。

対するセリオは人差し指を立てて、不敵な笑みを浮かべていた。

「当たり前じゃないの。わたしは恋愛仕様のスペシャル型なんだから」

すると、さっきよりも怪訝そうな表情で浩之が聞き返す。

「…どうして恋愛仕様だとそれが出来るんだ？」

「だって、一緒に食事も出来ないようじゃ寂しいじゃないの」

セリオがそう答えた直後、マルチがしゅんとしてしまった。と言うのも、マルチも薄々感じていたことであり、それをはつきりと言われてしまったのだから無理もない。だが、それに気づいたセリオはマルチに向かって、こう告げた。

「あら、マルチだって一応は恋愛仕様なんだから、出来ないことはないはずよ」

「え？ そんなのあるんですか？ わたし全然知らなかったです…」

「まあ、浩之さんと違ってわたしたちは食物を摂取しても、消化・分解は出来ないから、厳密な意味での『食べる』とはちょっと違うんだけど」

セリオが補足説明をしたが、浩之には「マルチも恋愛仕様」と言う言葉が気になっていた。

「マルチも恋愛仕様ってのは、ホントなのか？」

すると、セリオもすぐに答えてくれる。

「ホントよ。だってそうでなければ、浩之さんのところにいやしないもの」

「それって、つまり？」

セリオの言わんとすることが何となく分かった浩之が、わざと言葉を濁すとセリオもそれとなく肯定する。ただ、マルチだけは二人の言ってる意味がまだ飲み込めていないようで、一人きよんとしていた。

「平たく言うとお相手になれるための機能を持つてるのが恋愛仕様なの。味気ない型名じゃF型やS型と言われるんだけど」

「……」

「で、わたしはそのスペシャル型なわけ。∴話を戻すけど、いいかしら？」

「あ、ああ」

セリオが唐突に話題を切り替えると、浩之は生返事でそれに答えた。何はともあれ、恋愛仕様云々の話題は浩之としても聞いてて釈然としなかったので、話題が変わることに賛成だ。

「とりあえず実演してみせるけど、どうしましょうか？」

と、セリオは少し考えてるような表情で浩之に聞いてくる。

「何をだよ？」

「いえ、浩之さんは初心者だから、最初から飛ばすわけにもいかないでしょ」

飛ばすとか初心者とか、セリオの言葉の意味がよくつかめなかった浩之は、

そのまま正直にセリオに告げる。心のどこかに一抹の不安を感じないでもなかったのだが…。

『おねーさんの耳はロボの耳』第四話

「何のことだかよく分からないけど、まあ、セリオの好きにしてくれよ」
するとセリオは笑顔で、

「そう。それじゃ、コーヒーでもいれましょうか」

と答えて、浩之に背中を向け、すぐ準備にかかり出した。

「コーヒー？」

「ええ。浩之さんは薄目がいいんだったわよね、確か」

「ああ、そうだけど？」

さっきよりも一層の不安感しながら答える浩之。その返事を受けて、セリオは背を向けたまま、コーヒーをいれている。

（セリオは一体何をしようってんだ？）

とその後ろ姿を眺めながら、これからのことをあれこれと考えてみたが、何をしようと言うのか、よく分からない。

「さてと、それじゃ…」

しばらくしてからセリオが向き直す。手にはマグカップを持っている。

「それを飲むだけなのか？」

「ふふふ、それはお楽しみ。それじゃ、マルチもよく見といてね」

浩之には微笑みで答えて、マルチに向かって一声かけると、マルチもわずかに気合の入った表情で答える。

「はいっ、セリオおねーさん」

マルチの返事の後、セリオはマグカップを自分の口に持って行き、くっくっ一口含む。ち

『おねーさんの耳はロボの耳』第四話

なみにマグカップの中のコーヒーはかなり熱そうだ。

そして、マグカップを一度テーブルの上に置いて、そのまま浩之のほうに近づいて行った。セリオの口は閉じたままで、恐らくは熱いコーヒーを含んだままだろう。

「な、な…セリオ、お、おい！」

成り行きを見守っていた浩之がわずかに逃げ腰になり、セリオの名を呼んでみたものの、セリオの反応は何もない。ただ、笑顔のまま浩之に近づいてくるだけだった。

そして、おもむろに両手を浩之の頭に当てて、そのまま自分の顔を浩之の顔にすーっと近づけて行った。

浩之はセリオの顔が近づくのを避けようと試みたが、セリオが実に上手く押さえてるらしく、がんとして動かないのだ。やがて、セリオの顔は浩之の顔に重なるような位置になった。そこまで来て浩之はセリオの意図をようやく理解し、セリオの名を呼ぼうとしたがそれは途中でさえぎられた。

「セリ……………」

浩之の唇にセリオの唇が重なり、浩之が思わず閉じようとする、そこにセリオの舌が分け入ってくる。

「うわぁ……………」

思わずマルチが声を上げる。顔中を真っ赤に染めて。

「……………」

もはや言葉を発することの出来ない浩之は、観念してセリオに従うことにした。こうして、セリオの口から浩之の口へとコーヒーが流れて行った…。

『おねーさんの耳はロボの耳』第四話

「セリオおねーさん…凄いですう……あっ…」

「……………(ゴクッ)」

浩之の口に入ったコーヒーは不思議なことにさほど熱くなく、口に入れても特に刺激を感じることはなかった。そのせいもあってか、浩之はすぐにそれを飲み込んだ。

浩之が飲み込んだ後、セリオはそっと唇と手を離して、実に屈託のない表情で、

「…とゆうーことなのよ」

と告げた。それに対して、浩之はどこか焦点の定まらない様子でぼつりとおぼやくのだった。

「…………うーっむ……。セリオの唇って柔らかいよな、やっぱり……」

セリオが尋ねたのは唇の感触についての感想ではないのだが、そんなことを考える余裕はないらしい。それよりも本当にセリオの唇の感触に酔いしれていたのかも知れない。

「ありがと。それで、どう？」

しかしセリオもそんなことを予想していたのか、特に気にする様子もなく聞き返すだけだ。

「…いや、こーゆうーのも悪くはない……」

浩之もさすがに二度も同じような答えを返すことはなく、しみじみと言った風で答える
と、

「さて、それじゃ、残りはどーするの？」

とセリオが急かす。その言葉には「全部こうしてあげる」と言う意志がそこはかたなく感じられたので、さすがの浩之もそれは遠慮したいところだった。

『おねーさんの耳はロボの耳』第四話

「いや、残りは普通に飲むからいいよ。マルチだって見てるし…」

と、もっともらしい理由をつけたはずだったが、セリオはそれをあっさりと覆してくれる。

「見てないわよ、あの子は」

「へ？」

と間拔けな表情で答えながら、傍らを見ると確かにマルチは椅子にもたれるようにして止まっていた。

「さっきから止まったままだもの。わたしが口を付けたところでブレーカーが作動したみたいね。まったくウブなんだから」

「そーだったのか、それで静かなわけだ…」

「そーそー、だ・か・ら、全部こうして上げてもいいのよ」

と言いながらセリオは自分の唇に指を当ててみせる。

「…そんな嬉しいよーな恐いよーな申し出はとりあえず遠慮しておくよ…」

マルチのことを盾にとつてもセリオをかわせそうになかったので、素直に遠慮しておくと言うことにしたのはいいが、その程度で上手くかわせるはずもない。

「あら、恥ずかしがることないじゃないの」

このままではいつものセリオのペースに流されてしまう…そう直感した浩之はなお抵抗を試みる。

「だいいち、これのどこが『一緒に食事』なんだよ」

だが、それはまさに無駄な抵抗であった。

『おねーさんの耳はロボの耳』第四話

「コーヒーで納得できないのなら、ちゃんとご飯の方もやってあげるって言うてるじゃないの。これはあくまでも試しなんだから」

セリオの屈託ない表情と言葉に、浩之のかすかな抵抗など何の障害にもならずに一蹴されてしまう。

「つて、そーゆー問題じゃない！」

「まーまー、照れないでいーじゃない。ね？」

「セリオおお………」

それからしばらくの間、マルチは動くことがなかった。だが、ブレイカーの自動復帰がされた時。

「……うくん……あれっ？ セリオおねーさん、まだやってるんですかー、ホントに凄いですねー」

さすがに二度目の刺激には慣れたのか、セリオと浩之の姿を見て、驚きと畏敬の入り混じった表情で、そう言ったのだった。

さて、浩之がいつもと違う食事をしていた頃、あかりの方はと言うと、母親と台所で料理に熱中していた。もっとも、熱中しているのはあかり本人だけで母親の方はすでに抜けたがっているようだ。

「ねえ……あかり？」

「なあに、お母さん」

台所で一心不乱に何かを作っている娘に対して、あかりの母親は恐る恐るある提案をする。

「…もうやめない？」

だが、あかりは母親の方に振り向きもせず、短く答えるだけだった。

「駄目よ、まだやるんだから」

「て言ってもねえ、毎度毎度試作品を食べさせられる身になってちょうだい」

あかりが突然に創作料理をやりだすと言った時は、母親もまさかそれが一週間以上も続くとは思っていなかった。さらに、その創作料理の試食は何故か母親の役目らしく、このところまともな夕食と言うものに縁がないのだ。

「もう、お母さんがそんなに冷たいとは思わなかったわ」

あかりは少しきつい口調で言い返すが、母親にしてみれば、これ以上わけの分からない料理に付き合わされるのはごめんこうむりたいと言るのが本音である。それに今回の料理のターゲットはあの浩之ちゃんと言うことなのだから、いくらあかりが真剣に作ってるとは言え、変な料理を食べさせるわけには行かないと思っているのだ。

「だって、やっぱり浩之ちゃんには普通の料理でいいんじゃないかと思うんだけど」

母親がそう言うのと、あかりはくるっと振り向いて、強い口調で言い放った。

「駄目よ駄目！ とにかく普通の料理じゃ駄目なのよ！」

これまでのいきさつと言い、この様子と言い、ただならぬものを感じてはいたのだが、さすがにこれ以上付き合っているのは自分の身が持たない。

「一休何があったのか知らないけど、わたしは面倒見切れないから、勝手にしてちょうだいね」

『おねーさんの耳はロボの耳』第四話

と母親がついにさじを投げると、あかりはまた背を向けて、独り言でも言うかのようにつぶやいた。

「…ふっ、お母さんも所詮その程度だったのね…」

「あかり？」

母親が呼んでも、そのままの姿勢で言い続ける。

「…口では偉そうに言ってるけど、たかがメイドロボの作る料理にも勝てないってことなのね」

だが、その時。

「ちよっと…」

母親の表情にわずかに変化があった。

「あゝあ、こんな人がわたしのお母さんだったなんて、がっくりだわ…」

「…：あかりい」

またしても。

普段から温厚で人のいい母親で、その表情の変化を読み取るのは家族でなければ難しいかも知れない。だが、その時ははつきりと何かを感じ取れるほどだった。もちろん、あかりがそれに気づかないはずはない。何よりも、母親の本気を引き出させることを狙っているのだから。

「あれ、お母さんまだいたの？ 後はわたし一人でやるからいいわよ」

振り向きざまにあかりの一言。これで完璧なはずだ。

そして、その目論見は見事に成功した。

『おねーさんの耳はロボの耳』第四話

「ちょっと待ちなさい……」

と、低くつぶやくような母親の声。

「なあに？」

内心では「上手く行った」と思っているのだが、それを一切出さずに極めて普通に答えるあかり。

「さっきのセリフ、もう一度言ってご覧なさい？」

心なしか母親の身体が震えてるようにも見えたが、あかりはひとまず会話を進めることにした。

「一人でやるからいいわ」

「もっと前」

「これがわたしのお母さんだなんて、がっくり」

「もっと前！」

徐々に母親の口調が強いものへと変わって行く。

「口では偉そうに言ってるけど……」

「そう！ その後のセリフよ！」

「メイドロボの作る料理にも勝てない」

とあかりが言った瞬間、母親はこれまで以上にはっきりと怒りの色をあらわにしていた。あかりにしてみれば狙った通りなのだが、同時に不安めいたものも感じ始めていた。

「…何ですってえ？」

「聞こえなかったの？」

「メイドロボの作る料理にも勝てない…ですって？」

「何だ。ちゃんと聞こえてるじゃない」

「ジョーダンじゃないわっ！ このわたしが！ どうして機械の作る料理に勝てないってのよ！」

すであかりと母親の間に会話が成立してるとは言い難い。そんな母親の姿を見て、本当にこれが自分の母親なのかと思っただほどだ。だが、あかりの母親である以上、その性格や行動傾向が似てくるのは当たり前である。その時の母親の姿は数日前の自分の姿そのものであったことに、当のあかりは気づいていなかった。

「ちよつと、お母さん？」

「上等じゃないの、その勝負受けて立つわよ、あかり！」

「別に勝負ってわけじゃ…」

苦笑しながらあかりが反論すると、母親は睨みつけるような視線を浴びせてそれに答える。

「何？ アンタ人に手伝わすだけ手伝わせておいて、シラを切るつもりなの？ わたしは

そんな娘に育てた覚えはないわっ！」

ついでにオーバーな動作も加えているので、やや演技くさいところが感じられたあかりが控えめに突っ込みを入れる。

「ちよつとちよつと…」

だが、そんなことには一切構う気配はない。

「いいこと、あかり。よくは分からないけど、そのメイドロボにギヤフンと言わせてやる

のよ！」

と、そこにはいつもの温厚な母親の姿はなかった。ただ、激しく闘志を燃やしている一人の女がいるだけだった。

「今時そんな『ギャフン』なんて言葉、誰も使わないって…」

自分のしたことにわずかながら後悔を感じつつ、無駄とは知りながらも思わず突っ込みを入れてしまうあかりだった。

こうして、その日は深夜になってなお、あかりの家の台所には明かりがついていた。ちよつとややこしいが、あかりと明かりは別である。

「…ねえ、お母さん、もう明日にしない？」

「何言ってるのよ、あかり。アンタが言い出したことでしょ？ 最後までちゃんとやり遂げなさい」

すつかりやる気をなくしたあかりと、まるで正反対の母親。

「でも、もう一時を回ってるんだけどなあ…」

「なーに、アンタは若いんだから大丈夫よ。さてと、後はこれを仕込んでどうなるか、よね」

何が若いから大丈夫なのかは言わないあたりが常套手段なのだが、いずれにしてもあかりの弱音に流されるような母親ではない。

「ひとまず終わり？」

と言うあかりの控えめな質問にも、気力に溢れた表情で答える。

「これ一品だけじゃ足りないでしょ？」

「…まだやるのね……」

「当たり前じゃないのお。大体ね、料理は心なのよ、心！ ロボットなんかそんなのあるわけないんだから、このわたしが負けるはずないじゃない」

そう言う母親の表情は本当に生き生きとした。だが、負けるはずがないならどうしてムキになるのかと、反論することは出来なかった。

ましてや、その「心のないはずのロボット」セリオが実はマルチ以上の豊かな感情を持っていることなど、この時点でのあかりも母親も知らなかった。

ただ、あかりは自分の母親の姿を見ては、たとえようのないほどに後悔を感じていた。

「言うんじゃない……」

がっくりとうなだれるあかりに、夜はまだまだ明けそうになかった。合掌。

さて、浩之たちの方に話と時間を戻すでしょう。

浩之がコーヒーをすべてセリオの口移しで飲み干したところで、セリオがふとマルチに向かって言う。

「どお？ マルチもやってみる？」

「えー、上手に出来るでしょうか？」

さすがにマルチの方は戸惑いを隠せない。だが、先ほどセリオから「マルチにも出来るはず」と言われているので、マルチ自身はその気がないわけでもないと言ったところだろう。

「おいおい、セリオ……」

浩之がセリオをたしなめようとするが、取りつく島もなくセリオがあっさりとお切り返す。

『おねーさんの耳はロボの耳』第四話

「だって、浩之さんだってマルチにも食べさせてもらいたいでしょ？」

浩之の本音としてはその通りのだが、そのまま肯定するのは恥ずかしい。

「う……恥ずかしいからいいって」

「まーまー。マルチもやってあげたいでしょ？」

「え……そんな……浩之さんも恥ずかしくてることですから……」

話を振られたマルチは、自分ではなく浩之が恥ずかしくてると言う理由をかざしているが、それはつまりマルチ自身には否定する理由がないと言うことで、セリオがそれに気づかないはずがない。

「甘いわマルチ。浩之さんの本音は『マルチにもやって欲しいぜ、俺はあ』なんだから」

「……勝手に作るなよ」

「そーなんですか？」

「そーそー」

「違う！」

セリオに勝手に話を進められて、思わず言ってしまった浩之だった。だが、それはセリオに格好の攻撃材料を与えただけだった。

「……そんなにマルチが嫌いなのお？」

「う……」

「そ、そーなんですかあ？ わたしのこと嫌いなんですかあ？」

じわつと目に涙をためながら、浩之に尋ねるマルチ。これはもう必殺技（あるいは反則

技)と言ってもいいだろう。

「うう……そーじゃなくって……」

マルチの必殺技(反則技)にたじろぐ浩之に、セリオがとどめをさす。

「じゃあ、決まりね!」

「よかったですー」

と同時にマルチも一瞬にして笑顔に転じている。そのありさまを見て、浩之は心の奥底で「なんとなくセリオの影響を受けてるよーな……」と感じてしまうのだった。

「……何でこーなるんだろう……」

と、嬉しそうにするマルチと楽しそうなセリオを見て、思わずつぶやきがもれる浩之だった。

こうして、その日の夕食は浩之にとってこの上なく特別なものになった。ちなみにマルチが上手に出来たのかと言うと、意気込んだ割にはあえなく玉砕と言ったところだ。

と言うのも、セリオには口内に含んだ食餌を加熱/冷却するための機構があり、相手の好みの温度に短時間で合わせることが可能である。先ほど熱いコーヒーを含んだにも関わらず、浩之がすんなりと飲めたのはこの機構のおかげなのだが、マルチにはそれが無い。

従って、

「それじゃ、マルチも初心者だから、飲み物から始めるとしましょうか」

「はい、よろしくお願いします」

「……何でも好きにやってくれい」

「投げ槍ねえ。もう、嬉しいくせに素直じゃないんだから。……それじゃ味噌汁なんてど

『おねーさんの耳はロボの耳』第四話

う？ ちょっと熱いけど、どうにかなるでしょ」

「はい、頑張りますっ！」

「おーい、マルチい…」

「浩之さん、それでは行きますよっ」

「…うーむ」

「……」

「……………うわっ！ アチチっ！」

“ブワツ”

「きゃあっ！」

“バシャツ”

「ああああっ！ マルチごめん！」

「そっか、マルチには温度調節機能がなかったのね…。ごめんなさいね、浩之さん」

と言う次第である。合掌。

いずれにしても、まっとうな食卓の風景と言うものには程遠いありさまなのだが、言い出したセリオはまったく懲りていない様子で、

「今度山本さんに相談して、マルチにも温度調節機構を追加してもらいましょうか？」

とにこやかに提案するのだった。

その後、マルチに温度調節機構が追加されたかどうかは…読者のご想像にお任せするとして、あかりの方はどうなったのかと言うと、

「…ねえ、もう明るくなってきちゃったよ、お母さん…」

朝方になっても、やっていたのである。

「あら、それじゃもう明かりは消していいわね。やっぱり無駄な電気は消しておかないと」

照明器具のことを「電気」と言うのは割と一般的な表現なので、それについては特に触れないし、何と言ってもさすがに主婦の感覚である。だが、根本的な感覚にズレを感じているあかりはぼつりとつぶやく。

「そ、そういう問題じゃないと思うんだけど…」

そんなあかりの言葉が耳に入ったのか入らなかったのか…。母親は一層元気な声で、

「さして、これで一通りの試しが出来たから、これからもっと詰めて行かないとね！」

と、腕まくりのしぐさをしながら、言うのだった。その姿を見て、あかりは（…これが本当にわたしのお母さんのの？）

と密かに疑問を感じてしまうほどだった。

そして、あかりが呆けていると、母親が叱咤するように言う。

「ほら！ あんたも何呆けているのよ！ そんなヒマがあったら、こっちの方をやってちょうだい」

（…これって、悪夢よね？ だって、いくら何でもわたしのお母さんがこんな人だったなんて…）

完全徹夜を平気でこなし、なおバイタリティ溢れる母親の姿に、激しい戸惑いを感じながらも、あかりは母親に従うしかなかった。返事もせず、ただ言われたことをやって、この悪夢から早く醒めることだけを祈っていた。

『おねーさんの耳はロボの耳』第四話

そして、あかりにとっての悪夢がいつ終わりを告げたのかは、誰も知らない。後に聞くところによると、当時の浩之が

「あかり？ そう言えばここ一週間くらい顔を見ないな……」

と一度だけその名を口にしたただけだったと言うが、それも定かではない。

(続く)

『おねーさんの耳はロボの耳』第四話

初版:1997/09/16

第二版 (PDF化) :1998/07/28

(PDF書式変更) :1999/11/08

PDF書式変更:2016/05/07